

一心不乱の帝都復興

大正十二年九月一日に発生した関東大震災は首都圏の人命と資産を壊滅状態に追い込んだ。まったく運の悪いことに、震災直前に首相の加藤友三郎が急死、山本権兵衛に大命が降下されたものの組閣は難航。その最中に大震災が急襲した。後藤新平は組閣に失敗すれば悲劇の難局を乗り越えることは不可能だともみて、山本の薦めに応じて内務大臣を受諾、満身に力を込めて復興事業に乗り出した。遷都論を廃し、焼土全部買い上げ案を直ちに作成した。

しかし地主やこれにつながる既得権益者の抵抗は根強く、容易にこの案は受け入れられない。復興予算も後藤の当初の想定をはるかに下回るものであった。追い打ちをかけるようにして摂政宮が暴徒により発砲を受けるといふ「虎ノ門事件」が発生。山本内閣は総辞職、後藤も無念の退陣を余儀なくされた。在任期間は百二十日、帝都復興事業最大の牽引者が不在となつてしまったのである。震災後復興を担う政府機関として発足した帝都復興院も廃止に追い込まれ、蟬集していた若手の官僚、技術者も去つ

渡辺利夫（公益財団法人イヌス力会長）

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学、東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任（二〇一〇年十一月退任）。二〇一七年六月より現職。

て復興事業は頓挫しかねない事態となつた。

後藤の後を襲つて東京市長となり、後藤の意を体して復興事業に全力を注いだ人物が永田秀次郎である。氏は拓殖大学第三代学長の後藤を引き継いで第四代学長となるなど後藤終生の側近であつた。また財源が大きく縮小された区画計画予算の増額に全力を傾け、隅田川下流から相生橋、永代橋、清洲橋、蔵前橋、駒形橋、言問橋の六つの鉄製の架橋を成功に導いたのは技師の太田圓三である。その壮大で力強く美しい造形に促されるようにして、昭和通りに代表される樹林帯の幹線道路、隅田公園、錦糸公園、浜町公園、都市型住宅の先駆けとなつた同潤会アパートなどが次々と建設されていった。

『震災復興—後藤新平の120日』（藤原書店）によれば、後藤、永田、太田などの一心不乱の区画整理事業を通じて市街地は大改造され、その面積は消失地域の約九割に相当したという。これは世界の都市計画史上の快挙ともいふべきものであつたと賛辞している。